

新刊紹介

著者	里見 信生, 綿野 泰行, 植田 邦彦, 横山 俊一, 清水 建美, 木下 栄一郎
著者別表示	Satomi, Nobuo, Watano, Yasuyuki, Ueda, Kunhiko, Yokoyama, Toshikazu, Shimizu, Tatemi, Kinoshita, Eiichiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	42
号	1
ページ	7p.
発行年	1994-06-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055657



○中西弘樹 種子ひろがる(種子散布の生態学) 46 判, 256 頁, 1994 年 1 月 24 日, 平凡社(自然叢書 21), 2200 円。

種子散布の研究に取り組んでおられる著者は, 先に“海流の贈り物(漂着物の生態学)”を世に出されたが, 続いて, 本書を執筆発刊された。

内容は 10 章から成る。すなわち, 1 章 散布体と散布様式, 2 章 風散布, 3 章 水散布, 4 章 被食動物散布と貯食散布, 5 章 アリ散布, 6 章 付着動物散布, 7 章 自動散布(機械的散布), 8 章 重力散布と非散布, 9 章 人為散布, 10 章 植物の生態と散布型である。各章では具体的な例を挙げているので, 種子散布の面白さを理解することのできる参考書として, 一読されることをおすすめする。(里見信生)

○芝山秀次郎・森田弘彦 雑草の博物誌—水田雑草編— B 5 判, 96 頁, 1994 年 1 月 29 日, 社団法人全国農業改良普及協会(〒107 東京都港区赤坂 1-9-13, 三会堂ビル), 3000 円。

本書は共著者の両者が, 先に雑誌「技術と普及」に連載(昭和 63 年 5 月～平成 2 年 6 月)したものに, 今般, 加筆されて出版された由で, 芝山氏(農林水産省農業研究センター水田雑草研究室室長)は雑草の個生態学的な記載を, 森田氏(農林水産省九州農業試験場雑草制御研究室室長)は雑草の民俗学的な考察を, 分担執筆されているので, いささか趣向を異にする興味深い書と言えよう。雑草の研究者にはいうまでもなく, また, 一般の植物に関心のある方々にとっても, 一読されるようおすすめする。

1～80 頁は, ノビエにはじまり, ウリカワ, コナギ, ホタルイ…………と, 各種類ごとに記述され, 82 頁以下には, これらの方言名が標準名と対照して表示されている。(里見信生)

○鷲谷いづみ・森本信生 エコロジーガイド「日本の帰化生物」 A 5 判, 191 頁, 1993 年 12 月 31 日, 保育社, 1942 円。

地球レベルの環境問題の一つとして“帰化生物”による“生物相の均一化”をあげることができる。この問題は直接的に人の生活に関わる問題ではないため, 社会的な認識が極めて乏しい。筆者らは, 豊富なカラー頁とイラストを用いて, この問題をわかりやすく解説している。テーマ別に構成されており, 順に“身近な帰化生物, 帰化生物の生態学, 侵入・導入・分布拡大, 帰化生物がすみこむ場所, 帰化生物の生態的特性, 帰化生物の影響, 帰化生物リスト”となっている。

私が特に興味を覚えたのは, “帰化生物の影響—遺伝子汚染”の項である。帰化生物と日本の近縁種との交雑・遺伝的汚染だけでなく, この問題は日本の土着の種の人為的移動にもあてはまる。種の遺伝的内容というものは決して均一ではなく, 地域個体群ごとに固有の遺伝的内容をもっている。それゆえ何も考えずに, きれいだから, かわいいからといった理由で, 他の地域の個体を移動して植えたり, 放したりすることは絶体にきけなければならない。

純粋に生態学の視点から書かれており, 環境問題の啓蒙書としてだけでなく, 帰化生物を材料とした生態学の教科書としての趣も持っている。取り上げられた個々のトピックの中には専門的な内容も含まれているので, 本書を取っ掛かりとして, 深く生態学の理解を広げることも可能である。(綿野泰行)

○西口親雄 木と森の山旅 A 5 判, 342 頁, 1994 年 4 月 1 日, 八坂書房, 定価 2524 円。

筆者の前著「アマチュア森林学のすすめ, 八坂書房」でも一貫していたことだが, 筆者は常に立体的に森林を見ている。つまり, 単に樹木の生育している場所ではなく, 樹木と昆虫, きのこと, 鳥といった各種の生き物の織りなす一つの宇宙として森林をみているのだ。このことは頭で理解できることではなく, 本書の筆者のように, 森の生物にたいする深い理解と暖かい目, そして何より森との長いつきあひが必要なようだ。

本書は, 筆者の森林とのつきあひを, 旅のエッセイの形でまとめたもので, 関東から沖縄, そして東北, 北海道と, ほぼその旅を行った時期の順に構成されている。

私自身は山旅をすることがあっても, たいていは自分の研究材料採集にやっきになっていて, ろくに余裕がない。じっくりとでいいから, 自分なりの森林観を身につけて, 筆者のような境地に近付ければ, どんなにか楽しいだろうかと, 読んでいてつくづく思った。(綿野泰行)

○馬渡峻輔 動物分類学の論理 多様性を認識する方法 A 5 判, 233 頁, 1994 年 3 月 18 日, 東京大学出版会, 3399 円。

分類学とはすべての自然認識の出発点であり, かつ生命のたどってきた歴史的過程を明らかにする点において到達点でもある。しかしながら現状はともすれば軽視されがちな分野でもある。世の関心は「環境」から「多様性」に移ったとは言え, 正しい分類学への理解が広まったとは言いがたい。そうした現状にするべく立ち向かった本が出た。第 6 章分類学研究は特に一読すべき内容である。しかし, 残念ながら他の章は著者の意気込みとは裏腹に, 現代分類学の進歩の現状を正しく認識したものとは考えにくい点が散見される。(植田邦彦)

長瀬秀雄. 1986. 飛騨西部のアザミ属についての考察. 岐阜県植物研究会誌 3: 1-7.

大田 弘・小路登一・長井真隆. 1983. 富山県植物誌, 富山.

里見信生(監修), 石川植物の会(編集). 1983. 石川県植物誌. 石川県, 金沢.

渡辺定路. 1989. 福井県植物誌(自費出版).

資料: ホッコクアザミ *Cirsium matsumurae* Nakai var. *dubium* Kitam. の標本. Table 1 に示した以外のホッコクアザミと同定した標本を以下に示す.

滋賀県: 浅井郡浅井町高山, 福岡 1962.9.15 (KYO); 犬上郡多賀町, 福岡 1962.10.20 (KYO); 伊香郡木之本町, 福岡 1963.9.15 (KYO); 竹生島 (in Kyoto cult.), 北村 1982.9.23 (KYO); 伊香郡塩津村塩津, 浜本 1932.8.30 (KYO); 坂田郡伊吹町中津原, 村田 1993.8.21 (KYO). 福井県: 遠敷郡上中町河内, 渡辺 1983.10.11 (KYO); 遠敷郡上中町若狭ゴルフ場, 渡辺 1979.9.20 (KYO); 敦賀市福浦, 田代 1934.10.23 (KYO); 敦賀市黒河国有

林, 渡辺 1983.9.15 (KYO); 南条郡河野村河内, 渡辺 1978.11.23 (KYO); 丹生郡朝日町小川, 渡辺 1980.10.10 (KYO); 丹生郡厨, 堀 1932.10.9 (KYO); 丹生郡宮崎村熊谷, 堀 1932.10.9 (KYO); 今立郡池田町部子山, 渡辺 1983.9.18 (KYO); 今立郡池田町冠山峠, 若杉 1978.10.8 (KYO); 今立郡中河, 堀 1929.10.31 (KYO); 金津町世市野々, 渡辺 1980.9.23 (KYO); 金津町清滝, 渡辺 1982.9.5 (KYO); 吉田郡松岡町二本松, 1986.10.28 (KYO); 大野市経ヶ岳, 渡辺 1984.9.2 (KYO); 大野市倉又山, 渡辺 1973.9.29 (KYO). 石川県: 能登 (in Kyoto, cult.), 村 1931.10.27 (Type, KYO); 羽咋郡加賀一宮, 黒崎 1967.9.24 (KYO); 珠洲郡報竜山, 正宗 1952.10.26 (KANA); 鹿島郡石動山, 正宗 1952.9.27 (KANA); 鹿島郡宝達山, 正宗 1950.10.8 (KANA); 能登輪島, 里見 1952.9.13 (KANA); 能美郡辰ノ口, 正宗 1959.9.20 (KANA); 鳳至郡門前町鹿磯, 菊池 1975.9.20 (KANA). 富山県: 東砺波郡平村相倉, 三詰他 1976.9.23 (KYO).

(received December 18, 1993; accepted March 28, 1994)

○週刊 朝日百科「植物の世界」 A4判, 1994年4月17日創刊, 朝日新聞社. 各号550円.

「植物の世界」が本年4月に週刊雑誌として朝日新聞社から創刊されるに至った。私は予め予約をしていたので、発行されてまもなく手元に届けられるようになった。すでに私の手元には7冊が届けられている。毎号大変楽しく読ませてもらっている。早く全冊がたまらないか心待ちしているところである。

本誌は、カラー写真をふんだんに掲載し、見て楽しく読んでおもしろく、引いて役にたつ「植物百科」として、中学・高校生から社会人、家庭の主婦、さらには各分野の専門研究者まで、幅広い読者を対象に発行されたということである。

この雑誌の編集計画によると分類編119冊、テーマ編22冊、生理・形態編3冊、索引1冊で構成することになっている。この雑誌の分類編では、日本産の身近な植物を中心に、海外産のものも最大限に、被子植物、裸子植物、シダ植物、コケ植物、地衣類、藻類まで幅広くとりあげられる。そしてこれらは、類縁の植物分類体系に沿って分かりやすく整理され、より進化したものから原始的なものへと順を追って紹介される。また、各号には楽しいトピックスから最新の研究成果まで取り混ぜて各号の内容に関連させながら紹介される。さらには、分類的なまとめ方の他に、視野を地球規模まで大きく広げ、地球上の植物の多様な生き方をまとめて、「植物の生態地理」、また文化的な側面からまとめた「植物と人間の生活」をテーマ編として出版される。

しかし、この雑誌の最も特徴的なことは、自然の中に生きる植物の姿を写した全1万点にも及ぶ写真が掲載されることである。写真を見ているだけでも感動が伝わってくる。

本誌は中学・高校生から社会人、家庭の主婦、さらには各分野の専門研究者まで、幅広い人たちに受け入れられる内容となっている。ともあれ、一度読まれることをお勧めしたい。(横山俊一)

○Huang, T.C. et al. (eds.) *Flora of Taiwan. Second Edition. Vol.3. B5, 1084 pp. Dec. 31, 1993. Editorial Committee of the Flora of Taiwan, Second Edition, Department of Botany, National Taiwan University.*

Flora of Taiwan 第1版全5巻は1979年に完成したが、1985~1990年、第2版のための新しいプロジェクトが実施され、このほどその第3巻が出版された。新版の巻数も記述の形式も旧版と全く同じ、この第3巻には旧版同よう53.マンサク科から107.セリ科が収められている。内容的にはおしなべて訂正と追加が主となっているが、判型がまわり大きくなったこと、各所に属ごとの文献が入っていること、巻末に20頁にわたるカラー写真が入ったことなどが新趣向である。私が旧版で関わったユキノシタ科は、逸出植物ユキノシタを追加しただけの変更である。(清水建美)

長瀬秀雄. 1986. 飛騨西部のアザミ属についての考察. 岐阜県植物研究会誌 3: 1-7.

大田 弘・小路登一・長井真隆. 1983. 富山県植物誌, 富山.

里見信生(監修), 石川植物の会(編集). 1983. 石川県植物誌. 石川県, 金沢.

渡辺定路. 1989. 福井県植物誌(自費出版).

資料: ホッコクアザミ *Cirsium matsumurae* Nakai var. *dubium* Kitam. の標本. Table 1 に示した以外のホッコクアザミと同定した標本を以下に示す.

滋賀県: 浅井郡浅井町高山, 福岡 1962.9.15 (KYO); 犬上郡多賀町, 福岡 1962.10.20 (KYO); 伊香郡木之本町, 福岡 1963.9.15 (KYO); 竹生島 (in Kyoto cult.), 北村 1982.9.23 (KYO); 伊香郡塩津村塩津, 浜本 1932.8.30 (KYO); 坂田郡伊吹町中津原, 村田 1993.8.21 (KYO). 福井県: 遠敷郡上中町河内, 渡辺 1983.10.11 (KYO); 遠敷郡上中町若狭ゴルフ場, 渡辺 1979.9.20 (KYO); 敦賀市福浦, 田代 1934.10.23 (KYO); 敦賀市黒河国有

林, 渡辺 1983.9.15 (KYO); 南条郡河野村河内, 渡辺 1978.11.23 (KYO); 丹生郡朝日町小川, 渡辺 1980.10.10 (KYO); 丹生郡厨, 堀 1932.10.9 (KYO); 丹生郡宮崎村熊谷, 堀 1932.10.9 (KYO); 今立郡池田町部子山, 渡辺 1983.9.18 (KYO); 今立郡池田町冠山峠, 若杉 1978.10.8 (KYO); 今立郡中河, 堀 1929.10.31 (KYO); 金津町世市野々, 渡辺 1980.9.23 (KYO); 金津町清滝, 渡辺 1982.9.5 (KYO); 吉田郡松岡町二本松, 1986.10.28 (KYO); 大野市経ヶ岳, 渡辺 1984.9.2 (KYO); 大野市倉又山, 渡辺 1973.9.29 (KYO). 石川県: 能登 (in Kyoto, cult.), 村 1931.10.27 (Type, KYO); 羽咋郡加賀一宮, 黒崎 1967.9.24 (KYO); 珠洲郡報竜山, 正宗 1952.10.26 (KANA); 鹿島郡石動山, 正宗 1952.9.27 (KANA); 鹿島郡宝達山, 正宗 1950.10.8 (KANA); 能登輪島, 里見 1952.9.13 (KANA); 能美郡辰ノ口, 正宗 1959.9.20 (KANA); 鳳至郡門前町鹿磯, 菊池 1975.9.20 (KANA). 富山県: 東砺波郡平村相倉, 三詰他 1976.9.23 (KYO).

(received December 18, 1993; accepted March 28, 1994)

○週刊 朝日百科「植物の世界」 A4判, 1994年4月17日創刊, 朝日新聞社. 各号550円.

「植物の世界」が本年4月に週刊雑誌として朝日新聞社から創刊されるに至った。私は予め予約をしていたので、発行されてまもなく手元に届けられるようになった。すでに私の手元には7冊が届けられている。毎号大変楽しく読ませてもらっている。早く全冊がたまらないか心待ちしているところである。

本誌は、カラー写真をふんだんに掲載し、見て楽しく読んでおもしろく、引いて役にたつ「植物百科」として、中学・高校生から社会人、家庭の主婦、さらには各分野の専門研究者まで、幅広い読者を対象に発行されたということである。

この雑誌の編集計画によると分類編119冊、テーマ編22冊、生理・形態編3冊、索引1冊で構成することになっている。この雑誌の分類編では、日本産の身近な植物を中心に、海外産のものも最大限に、被子植物、裸子植物、シダ植物、コケ植物、地衣類、藻類まで幅広くとりあげられる。そしてこれらは、類縁の植物分類体系に沿って分かりやすく整理され、より進化したものから原始的なものへと順を追って紹介される。また、各号には楽しいトピックスから最新の研究成果まで取り混ぜて各号の内容に関連させながら紹介される。さらには、分類的なまとめ方の他に、視野を地球規模まで大きく広げ、地球上の植物の多様な生き方をまとめて、「植物の生態地理」、また文化的な側面からまとめた「植物と人間の生活」をテーマ編として出版される。

しかし、この雑誌の最も特徴的なことは、自然の中に生きる植物の姿を写した全1万点にも及ぶ写真が掲載されることである。写真を見ているだけでも感動が伝わってくる。

本誌は中学・高校生から社会人、家庭の主婦、さらには各分野の専門研究者まで、幅広い人たちに受け入れられる内容となっている。ともあれ、一度読まれることをお勧めしたい。(横山俊一)

○Huang, T.C. et al. (eds.) *Flora of Taiwan. Second Edition. Vol.3. B5, 1084 pp. Dec. 31, 1993. Editorial Committee of the Flora of Taiwan, Second Edition, Department of Botany, National Taiwan University.*

Flora of Taiwan 第1版全5巻は1979年に完成したが、1985~1990年、第2版のための新しいプロジェクトが実施され、このほどその第3巻が出版された。新版の巻数も記述の形式も旧版と全く同じ、この第3巻には旧版同よう53.マンサク科から107.セリ科が収められている。内容的にはおしなべて訂正と追加が主となっているが、判型がまわり大きくなったこと、各所に属ごとの文献が入っていること、巻末に20頁にわたるカラー写真が入ったことなどが新趣向である。私が旧版で関わったユキノシタ科は、逸出植物ユキノシタを追加しただけの変更である。(清水建美)

3. 考察 上記の形質を用いれば、タカネトウウチソウとカライトソウを識別するのは困難ではない。両者の Skdh の遺伝子座はタカネトウウチソウとカライトソウでそれぞれ a および b に固定していた。参考のために調査した石川県白山のカライトソウ (標本番号 KANA 156620) の遺伝子型も bb であった。これに対し、ユキクラトウウチソウでは、Skdh 遺伝子型は ab あるいは bb であった。このように、ユキクラトウウチソウのほぼ半数が推定母種のアロザイムを併せ持ち、ユキクラトウウチソウに固有なアロザイムは他の遺伝子座でも全く検出されなかったことから、この分類群がタカネトウウチソウとカライトソウの雑種であることが強く支持される。また、一部のユキクラトウウチソウがカライトソウのマーカーのみをもつことは、F2 およびカライトソウとの B1 などの形成があったことを示唆している。ユキクラトウウチソウと見なされる群は花穂の長短、花の咲き順、花色、雄ずい数など、高橋(1980)が指摘しているようにきわめて多型であり、中には花穂の垂れ下がる個体 (標本番号 156566, 156600, 156605) や花が花穂の中央から上下へと咲き進む個体 (標本番号 156577, 156585, 156612, 156619) もあった。このような形態的多型が存在する原因としては、アロザイム解析で示唆されたように、交雑が F1 で止まらず、後代が形成されているため、形態形質の分離が起こったと想定することができる。ちなみに、当地においては、タカネトウウチソウはカライトソウに比べて、個体数は著しく少ない。

〔標本〕 標本番号は、すべて KANA 156000 番台であるので、下 3 桁のみを示す。

タカネトウウチソウ (6 個体) : 587, 590, 596~598, 601

ユキクラトウウチソウ (32 個体) : 566~569, 574~578, 581, 582, 584, 585, 588, 591~595, 597, 600, 602~605, 612~619

カライトソウ (13 個体) : 564, 570, 571, 573, 579, 583, 589, 606~611

ユキクラトウウチソウの生育地に案内され、色々のご教示下さった長野県岡谷市の今井建樹氏に深謝する。

引用文献

原 寛 1949. 植物研究雑誌 23 : 30-31.

Honda, M. 1933. Bot. Mag. Tokyo 47 : 433-434.

奥山春季 1974. 採集検索日本植物ハンドブック pp. 88, 449. 八坂書房, 東京.

清水建美 1982. 原色新日本高山植物図鑑 (I) p. 236. 保育社, 大阪.

高橋秀雄 1980. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学) 12 : 4-6.

(*〒 920-23 石川県石川郡吉野谷村木滑 石川県白山自然保護センター The Hakusan Nature Conservation Center, Kinameri, Yoshinodani-mura, Ishikawa-gun, Ishikawa 920-23, Japan; **〒 920-11 金沢市角間町 金沢大学理学部植物自然史講座 Laboratory of Plant Natural History, Faculty of Science, Kanazawa University, Kanazawa 920-11, Japan)

○ 岡田博・植田邦彦・角野康郎 (編著) 植物の自然史—多様性の進化学 A5 判, 263 頁. 1994 年 1 月 25 日, 北海道大学図書刊行会発行. 3090 円.

この本は、タイトルには分類学の文字はみられないが、現在の植物分類学の持っている学問的な魅力を若い人たちに伝えるべく、植物分類学の多様な展開を標榜して中堅どころの研究者 14 名が、それぞれに自らの研究を紹介するという形で編まれた野心的な著作である。内容は 5 部 14 章からなるが、それぞれの章は独立しており、いわばトピック方式なのでどの章から読み始めても支障はない。中には、保全生物学の話あり、分子系統学の話あり、木材解剖学の話あり、植物の性の話あり、染色体の話ありで内容は多岐にわたり、しかも斬新であり、文の巧拙はみられるもののそれぞれの章が読みごたえのあるものとなっている。

このように、この本は確かに魅力的ではあるが、それが即現代の分類学であるとするれば、内容が多様であるだけに分類学は形態学・遺伝学・生態学・地理学・進化学にスクラップされてしまったのかと誤解されかねない。強いていえば、それらの多くは γ -分類学に入るのかも知れない。しかし、古典的とはいえ、 α -分類学や β -分類学が分類学のみならず植物学全体にとっても基本的に重要であることは、昔も今も変わりはない。まして生物学は多様性の時代といわれる今日、その重要性はますます大きくなっている。その点、この本が現代の分類学を紹介するというのであれば、 α -、 β -の持つ魅力を意欲的に紹介する章がいくつか欲しかったと思う。多様性の進化学は、伝統的分類学を無視しては成立しないだろう。若い世代が伝統的分類学の上に新しい分類学をビルドされることを期待したい。

(清水建美)

Kinoshita (1986) も同様の報告をしている。したがって、これらの結果は Lloyd and Webb (1977) の見解を支持しない。さらに Kinoshita (1986) は花茎の機械的な強度にも差があると報告している。テンナンショウ属植物にみられる開花や花梗の長さにもみられる性差は、雌雄の繁殖戦略の違いやそれぞれの種の特性を表しているもの (邑田, 1986) と思われ、多くの種について同様のデータの集積が望まれる。

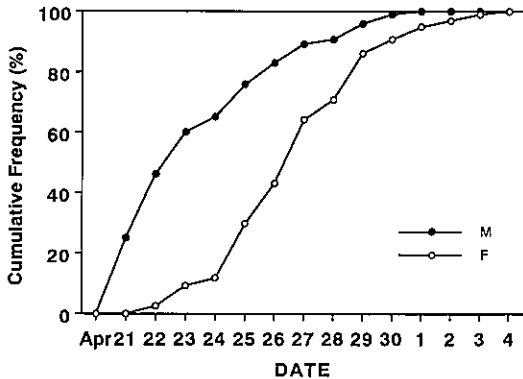


Fig. 1. Cumulative frequency of flowering in *A. ser-ratum* at Botanic Garden, Kanazawa University in 1994. F, Female; M, Male.

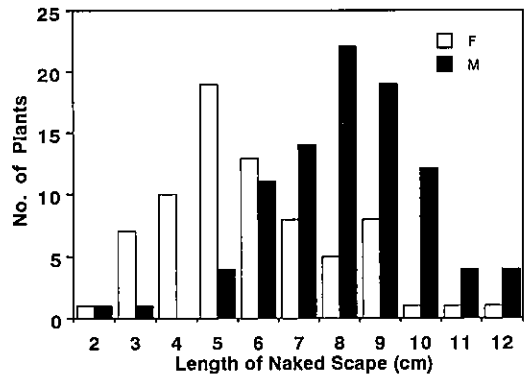


Fig. 2. Frequency distribution of the length of the naked scape. F, Female; M, Male.

引用文献

- Charnov, E. L. 1992. The theory of sex allocation. Princeton Univ. Press, Princeton, N. J.
- Kinoshita, E. 1986. Size-sex relationship and sexual dimorphism in Japanese *Arisaema* (Araceae). *Ecol. Res.* 1: 157-171.
- Lloyd, D. G. and Webb, C. J. 1977. Secondary sex characters in plants. *Bot. Rev.* 43: 177-216.
- 邑田仁: 1986. 日本産テンナンショウ属の分類形質と分類 (2) 花梗の長さや胚珠数一特にヒガンマムシグサとムロウマムシグサに関連して. *Acta Phytotax. Geobot.* 37: 27-41.
- (〒 920 金沢市丸の内 金沢大学理学部付属植物園 Botanic Garden, Faculty of Science, Kanazawa University, Kanazawa 920, Japan)

○渡邊定元 樹木社会学 B5判, 450頁, 1994年2月18日, 東京大学出版会, 5,356円。

植物の研究者の中には草が大好きな人間と、木が大好きな人間がいるらしい。この本は「木大好き人間」が樹木に徹底的にこだわって書いた本である。著者には草のことなど眼中にないらしい。樹木社会学というタイトルから植物群集を主に取り扱った書物と受け取られかねないが、じつはそうではない。著者が「はじめに」で述べているように、生物集団を構成する個々の種を中心に議論が展開していく。副題に Species of Trees と付けられているのが象徴的である。第1章は「樹木社会学の立場」と題して、様々な分野との関連を概括的に述べ、次章からの内容を鳥瞰させている。第2章からは様々な分野で樹木がどう扱われているかがえんえんと述べられる。例えば樹木の系統分化、樹木の性型と交配様式、樹木の意志伝達など。著者の木に対するこだわりがいたるところからあふれ出してくる内容であるが、樹木のところを一般の植物と読み変えてもなんら差し支えない内容である。ぜひ一読をお薦めする。(木下栄一郎)

○戸部博 植物自然史 B5判, 188頁, 1994年4月25日, 朝倉書店, 2,781円。

最近相次いで同じようなタイトルの本が出版されて多少まぎらわしい。この本は陸上植物の歴史を述べたものである。我々が見ている植物は過去の歴史に規定されているため、現在の植物を知るためには過去を知らなければならない。例えば種子とはなにか、被子植物の被子とはどういうことかを説明するためには、それらがたどってきた歴史を説明する必要がある。ところがこれはとんでもなく大変である。それは日本語で書かれた良い教科書が無いことに原因の一つがある。この本は生物学を学び始めた学生にとってたいへん良い本である。また最新の情報を取り入れてあり、ずいぶんと教えられることがあった。学生ばかりでなく植物を扱う専門家にもお薦めする。(木下栄一郎)

○ 岩槻邦男(監修) 日本絶滅危機植物図鑑 レッドデータプランツ AB 判変形, xxiv+208 頁, 1994 年 3 月 20 日, 宝島社, 2980 円。

1989 年にわが国で初めて、植物のいわゆるレッドデータブックが刊行された。しかし発行部数が少なく、また写真などが添えられていたわけではなかったため、専門家以外には使いにくいものであったことは否めなかった。そこで発行当初より普及版の出版が議論されていた。それを受けて、すでに日本植物分類学会の編集によりその趣旨に基づいた本が発行され(書評:本誌 41 巻 19 頁)、また滅びゆく日本の植物 50 種(岩槻邦男編著, 築地書館, 2060 円)も世に出ている。今回さらに(著者の多くは重なっているが)ここに紹介する本が出された。本書ではレッドデータブックにリストアップされた 895 種の内、315 種についてはその解説が載せられ、そのうちの 243 種については適切なカラー写真が添えられている。どのような植物がどのような状況にあるのか、誰にも理解しやすく意図したことがわかる。現在、環境庁により新たにレッドデータブックが編纂されようとしている。この時期にこのような本が多数市販されるようになったことは一般の関心を高めるものとして喜ばしいことである。何よりも日本の植物が具体的にどのような状況にあるのかを知ることがまず第一だからである。ただ、だからこそ残念なことは、例えばコブシモドキの解説に見られるように、調査、問い合わせ等を何も行わず、公表された論文のダイジェストを記述しただけのものがあることである。実体の把握が最も肝要なこの種の本では厳に避けるべきことであろう。(植田邦彦)

○ 琵琶湖自然史研究会(編著) 琵琶湖の自然史 琵琶湖とその生物のおいたち 自然史双書 5 B 6 判, 340 頁, 1994 年 2 月 10 日, 八坂書房, 2400 円。

このところ自然史ばかりである。なかには自然誌と混同される場合も多いが、この双書は自然史とは何かを述べた上で本文が始まるところが大変嬉しい。内容は、「序章 琵琶湖」「琵琶湖のおいたち」「琵琶湖の生物のおいたち」「化石が語る古琵琶湖」の 4 章からなり、琵琶湖が 400 万年の歴史をもち島弧の湖としては世界最古であること、植物 5 種、動物 54 種がそれぞれ固有であることなど、楽しい話題が平易に綴られている。執筆者の顔触れ上、植物の出番は少ないが、琵琶湖を知るには欠かせない 1 冊である。ただ、琵琶湖固有の大型植物サンネンモが何であるのかこの本からはとうとう分からなかったのは悔しい。(清水建美)

○ 石川茂雄 原色日本植物種子写真図鑑 A 4 判, 326 頁, 1994 年 5 月 20 日, 石川茂雄図鑑刊行委員会(〒174 東京都板橋区蓮沼町 70-6 伊佐馬克方), 2800 円。

植物の形態に関する情報は、種子にしる果実にしる芽生えにしる根系にしるまだまだ不足している。生物の多様性の保全が盛んに喧伝されている今日、そうした情報の集積は基本的に重要である。こんな時、種子の発芽生理を専門とされた著者が、今度は種子の形態の多様さ美しさに魅せられ、自らの採集はもちろん全国の多数の協力者から材料の提供を受け、140 科 1005 属 2114 種の種子のカラー写真をエングラマーの体系に準拠し一連番号をつけて印刷したのがこの本である。原則として 1 頁に 8 枚(8 種)の写真が配置され、頁下には写真番号・和名・学名・大きさ(長径・短径を cm で表示)が示されている。写真は自ら工夫した接写装置をもちいた通常のカメラによる撮影であるが、カラーであるが故に走査電子顕微鏡では得られない味があるし、実物の形質が如実に写し出されている。ただ、まえがきに短く断ってはあるものの、形態学的には即種子ではないもの(ブナ・キンボウゲ・バラ・セリ・キク・イネ・カヤツリグサ各科など)も日本産でないもの(イチヨウ・ヒマラヤスギ・リギダマツ・モクマオウ・パラミツ・ハンテンボク・ドリアン等等)もすべて同様に扱われているのは、書名が書名だけに一般には誤解を招くのではなからうか。せめてこれらの写真には短い注記が欲しかったと思う。ともあれ、「種子」の形・色合い・大きさの多様性を存分に満喫させてくれる得難い本である。(清水建美)

○ 「北陸の樹木」編集委員会(編) 北陸の樹木 A 4 判, 127 頁, 1994 年 3 月, 榊シ・エ・ピー(〒930 富山県富山市大手町 6-14 市民プラザ 3F), 800 円。

タイトルから一見、樹木の名前を知るためのハンドブックあるいは図鑑のように思われるがそうではない。この本は富山、石川、福井の 3 県で見られる巨木や社叢または代表的な森林を紹介したものである。紹介されている多くのものは国、県あるいは各市町村の天然記念物に指定されており、歴史やいわれなどが詳しく紹介されている。また、「木と建造物」、「気になる木のおはなし」、「木の文化財一覧表」などの樹木や森林に関する記事も豊富である。それらの写真や文章から北陸地域の自然や歴史、人々の生活等を伺い知ることができる。この本をもとに、北陸地方の巨木などを尋ね歩くのも楽しいであろう。定価は 800 円となっているが、紙質も写真もたいへん良く、その 3 倍程度の定価で売られてもおかしくないつくりである。また、売上金は緑の資源保護活動へのチャリティーに活用されるとのことである。内容についても価格についてもたいへんお買い得な本である。(木下栄一郎)

○ K. Bremer *Asteraceae-Cladistics and Classification* A5, 752pp. 1994. Timber Press, Portland.

1976年にThe genus *Relhania* (Compositae) およびThe genus *Leysera* (Compositae) の2篇の論文を書いて、植物分類学にはじめて分岐論をとりいれた著者が、以来20年近い年月をかけ5人の協力者を得て作りあげた新しいキク科の分類体系を解説したのが、この本である。構成は、序論篇と分類篇の2篇23章からなり、序論は分岐論・分類・形態・進化の4章、分類篇はバルナデシア亜科に始まる3亜科16連にそれぞれ1章をあて計19章から成る。たとえば、バルナデシア亜科(第5章)では生活形、葉腋の刺針の有無など22個の形態的形質を用い、コウヤボウキ連を外群としてつくられた最節約樹に基づき9属の系統関係を論じている。ところで、われわれはキク科の2亜科(キク亜科とタンポポ亜科)13連の分類体系に慣れているが、著者は1987年、分岐分類学的手法によって従来のコウヤボウキ連バルナデシア亜連(南米特産)は形態的に他のすべてのキク科植物の姉妹群に当たることを指摘、同年 Jansen and Palmer によってバルナデシア亜連の葉緑体DNAには22 kbpの大きな逆位配列があることが判明したと相まって、1992年バルナデシア亜科 *Barnadesioideae* (Benth.) K. Bremer et R. K. Jansen が提案され、今では3亜科体系は定着した。その結果、著者によれば、キク科はバルナデシア亜科・タンポポ亜科(コウヤボウキ連・アザミ連・アキノノゲシ連・ショウジョウハグマ連・リアベア連・アークトチス連)・シオン亜科(オグルマ連・プルケア連・ハハコグサ連・キンセンカ連・シオン連・キク連・キオン連・テンニンギク連・メナモミ連・ヒヨドリバナ連)の3亜科16連となった。日本のフロラでも最大の比重をしめるキク科の新しい分類体系として注目すべきである。現在、植物の系統樹作りを分子データのみでおこなうべきか、形態データと分子データを組み合わせておこなうべきか論争が盛んであるが、この本では少なくとも連や属の系統解析には分子データは全く使われていない。バルナデシア亜科同様、形態データと分子データによる分類群の認識が一致することは十分期待出来る。(清水建美)

田村道夫* : キングドニアの分類学的位置 Michio Tamura : Systematic position of the genus *Kingdonia*

キングドニアは中国西部(雲南西北部、四川、甘肅南部、山西西部)の高度2500-4000 mの亜高山帯の針葉樹林または針葉・広葉混交林のコケむした林床に生える多年草で、開放二分岐脈系と偶数(普通2本)の葉跡をもつことで多くの植物分類学者や形態学者の注意を引いてきた。この植物を記載した Balfour f. et W. Smith (1914) はこれをキンポウゲ科に分類した。このよう葉は被子植物ではまったく稀であり、Diels (1932) は同じような葉の性質を持つ *Circaeaster* との類縁を強調した。彼の意見に同調する人は多く、ランクや所属する科は違っても、Janchen (1949), Cronquist (1968), Thorne (1974) らは両者を同じ分類群に入れている。しかし、*Circaeaster* は *Kingdonia* やキンポウゲ科とは異なった独特の特徴を多く備え、キルカエアステル科とみなす意見が大勢を占めてきている。一方、*Kingdonia* はかなり特殊ではあるが、キンポウゲ科と相いれないのは沼生型胚乳形成くらいである。Airy Shaw (1966) や Dahlgren (1975) のように *Kingdonia* に対しても独立した単型科、キングドニア科をもうける処置もあるが、わざわざそのような処置をする必要はない。Takhtajan (1980) は、キンポウゲ科のなかの独立した亜科としているが、心皮の様子や胚珠の付きかたなどイチリンソウ連と同じである。キンポウゲ科イチリンソウ連のもとに単型のキングドニア亜連を置きたい。

いま述べたいろいろの群についてはそれぞれ学名がつけられているが、ラテン記載をとまなっているのは王文采のキングドニア連だけであるので、それを亜連に組換える。

Rununculaceae Juss. **Anemoneae** W. T. Wang et C. Y. Chang

Kingdoniinae (W. T. Wang et C. Y. Chang) Janchen *ex* Tamura, comb. nov.

Kingdonieae W. T. WANG et C. Y. CHANG in ZHANG, *Acta Phytotax. Sin.* 20: 405 (1982). *Kingdoniinae* JANCHEN *Österr. Akad. Wiss. Math.-Naturwiss. Kl. Denkschr.* 108: 53, *nom. inval., excl. p.* (1984); TAMURA *Sci. Rep. Osaka Univ.* 16: 1967: 29, *nom. inval.* (1967). *Kingdonioideae* THORNE, *Aliso* 8: 180, *nom. inval., excl. p.* (1974); *Nordic J. Bot.* 3: 102, *nom. inval.* (1983); TAKHTAJAN, *Bot. Rev.* 46: 262, *nom. inval.* (1980).

Kingdoniaceae A. S. FOSTER *ex* AIRY SHAW In WILLIS, *Diction. Fl. Pl. Fern.*, ed. 7: 600, *nom. inval.* (1966); DAHLGREN, *Bot. Not.* 128: 125, *nom. inval.* (1975).

Circaeasteraceae (non HUTCH.) CRONQUIST, *Evol. Class. Fl. Pl.* 365, *p. p.* (1968); THORNE, *Nordic J. Bot.* 3: 102, *p. p.*

(*〒549-64 和歌山県那賀郡打田町 近畿大学生物理工学部 Kinki University, Utita, Naga-gun, Wakayama 549-64, Japan)